

東北 復興日記

129

万葉集第三巻に「みちのくの真野のかや原遠けども面影にして見ゆといふものを」という歌が載っています。この真野のかや原が、現在の福島県南相馬市鹿野区の真野地区といわれています。私たちのグループ「げや木塾」は、この歌の

作者、笠(かぶ)郎(ろう)女(め)が大伴家持に送った恋文から、郎女の思いとその時代の思いを重ね、なにか町おこしにできないかと考え、和紙で「いらつめ人形」を作ることになりました。

鹿野区は震災から四年になります。仮設住宅がいっぱいです。その仮設住宅がある所は数十年前は桑畑でした。時代の流れで養蚕農家が少なくなり、桑畑だけが残っているのを見て、この桑の木から和紙を作れないかと考え、いろんな所へ出向き、勉強して作ってみました。しかし、素人の私たちにとても大変な工程で難しく、結局和紙専門店より仕入れることになりました。

万葉の里から人形発信

民芸品創作クラブ

「げや木塾」代表

和泉ひで子さん



震災後は商品や材料が津波で流されたため、活動はできないものとおきらめていました。そんな時、二〇一二年南相馬復興大学のお誘いがあり参加しました。メンバーは少なくなりました。震災後は商品や材料が津波で流されたため、活動はできないものとおきらめていました。そんな時、二〇一二年南相馬復興大学のお誘いがあり参加しました。メンバーは少なくなりました。



たが活動も再開でき、商品も和紙を幾重にも重ねた「いらつめ人形」やお土産品向けの人形をはじめ、先生方のアドバイスを頂きながら、「おりおり」というブランドで実用的なもの(名刺入れ、ブックカバー、慶弔用ふくさ等)がいろいろと開発できました。写真。一番うれしかったのは、げや木塾の再開はもちろんです。和紙専門店に私たちの商品を置いていただけるようになったことです。

これからは万葉の里から、「おりおり」の商品が広まるよう、販路の拡大と制作する仲間を増やし、前に進みたいと思っています。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。